

## 袋井市総合教育会議録（要旨）

会 議 名	平成28年度第1回袋井市総合教育会議
開 催 日 時	平成28年8月29日（月）午後2時00分
会 議 時 間	午後2時00分から午後4時00分まで（2時間0分）
場 所	袋井市役所 4階 庁議室
出 席 者	原田 英之 袋井市長 前嶋 康枝 教育委員長 上原 富夫 教育委員長職務代理者 伊藤 静夫 教育委員 豊田 君子 教育委員 鈴木 典夫 教育長 <span style="float: right;">（計：6人）</span>
欠 席 者	無し
傍 聴 者	1名
当局出席者	大河原 幸夫 教育部長 早川 俊之 教育企画課長 大庭 尚文 教育企画課総務企画係統括係長 伊藤 千ひろ 教育企画課総務企画係長 乗松 里好 すこやか子ども課長 加藤 貞美 学校教育課長 久野 芳久 生涯学習課長 <span style="float: right;">（合計：13人）</span>
会議に付した 事案	別紙次第のとおり

# 平成28年度 第1回袋井市総合教育会議 次第

日時：平成28年8月29日(月)午後2時～

場所：袋井市役所4階 庁議室

## 1 開 会

## 2 市長あいさつ

## 3 議事

### (1) タブレットICTの有効活用について

#### 【資料説明】

- ・浅羽南小学校3年生が実施したタブレット学習について(資料1)
- ・1人1台で使用するタブレットの活用の可能性について(資料2)

#### 【感想・自由意見】 タブレット学習の今後の進め方(資料3)

### (2) 英語教育・市民の英語力向上について

#### 【資料説明】

- ・本市のグローバル人材育成について(資料4)

#### 【意見交換】 市民全体の英語力を高めるには

- ・小学校における英語教育の推進について
- ・市民の英語力向上の推進について

## 4 その他

### (1) 第2回袋井市総合教育会議について

- ・日時 平成28年10月26日(水)午前10時～
- ・場所 袋井市役所4階 庁議室

## 5 閉 会

## 平成28年度第1回袋井市総合教育会議 会議録（要旨）

### 1 開会

#### ●教育部長

みなさんこんにちは。定刻となりましたので、第1回の袋井市総合教育会議を開催させていただきます。まず、会に先立ちまして、会議録署名お二人につきまして、規則により議長が指名することとなっておりますが、事務局からの提案とさせていただきたいと思っております。上原委員長職務代理と伊藤委員にお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

それでは、原田市長から御挨拶をお願いいたします。

### 2 市長あいさつ

#### ●市長

こんにちは。本年度第1回目の総合教育会議でございまして、テーマは二つということで、ICT教育、それから英語教育、この二つ。

話は全然違いますけれども、先週私は、土曜日までかな、木、金、土で熊本、それから阿蘇へ行って、熊本へ行って地震の跡を見たら、4箇月経っているんですね。ところが、まだ家が倒れたままなんです。これは、僕自身もそうだけれども他に行った市長もみんなそう言ったんですけれども、阪神淡路が平成7年でしょ、それから東日本が平成23年、5年前だね。そうでしょ？ この間だとだいたい15、6年経っているじゃないですか。15、6年経つと日本の国力、いろいろな面での国力はあるかもしれないけれども、復興に向かってガーっところ、いけるのね。で、5年、あれから5年でしょ熊本地震。5年の猶予だとねやっぱり、何かねほら、みんなの意識もって言うんだけれども、私は、市長らみんなと話していて、日本の国力ってそんなにね、あるようで無いんじゃないか、つまり、5年間だとね、ワーっと直していく力が非常に弱い。その間にいろんな、堅くやっているから、資材が高くなりましたとか、重機が、あるいはボランティアが集まらないだとか、そういう全ての総合力見て、そういう感じがする。だから、言葉は非常におかしくなっちゃうんだけれども、仮にここに地震があるのは、仮に最短であっても、ああいう東日本とか熊本とかが、一定のスパンをおいてくれないと、ということで申し上げているんですけれどもね。日本の国は割とそういう災害に強いし、みんなまとまるし、だけれども、国力っていうか総合的な国力から見ると、ずいぶんあの阪神淡路とか東日本で消耗して、ある程度スパンがあれば消耗しても持ち直しますけれども、あまりにも熊本と東日本と近すぎるとか、またこんなに建設したときに災害があると、さすがの日本の国もなかなかそういう力がなくなるのじゃないかなあと、異口同音にみんな、景色を見てそういうことを言ってね、私もそれを感じた。そう思いました。災害の内容の話でなくて、そんなことで恐縮なんですけどそういう感じがします。

さて今日は、いわゆるICTを学校現場でどうやってやるかということ、それから今度、英語の方は、学校の英語とそれからもうひとつは市民の英語をどうするかということ。この内容について、先に1をやって、それからその次の2のほうに移っていく、順序は別々で。ただね、これで、今夜実は、地方創生の会議も私持っているんですけれども、そこでもプレゼンするほうに要求しているんですけれども、今こうなっています、今こうなっています、こうなっていますというのを、この何時間か時間をかけて説明し

て、みなさんそれを知って、知るだけだったら意味ないというか。また、今こうなっているのもそれ今もうちょっとこう、それこうなの？じゃなくて、これを説明するサイドも、課題が何なんだ、乗り越えなくちゃいけない壁は何なんだ、というところを、今になって僕がこうやって言うと迷うかもしれないけれども、そういうことを少し意識しながら説明してくれませんか。そうするとね、私たちも聞くときに、この事業の内容はこうでございますって聞くと、次に私たちの気持ちは事業の内容のより細かいところへ、もう重箱の隅つつくようなところへ話がいったちゃって、じゃなくて、課題が何だ、壁は何だ、壁の中にも、時間という壁もあるし、それからお金という壁もあるし、制度という壁もある、それからもう一つは、私たちのメンタリティというか、私たちが思っている今の気持ちを変えなくちゃいけないかもしれないっていう壁もあるじゃないですか。そういうことを僕たちは意識して、じゃあこのところで乗り越えなくちゃいけない壁は、このうちの主にどれなんだろうな、ということ、僕はこの総合教育会議って、そういうところの議論をしないと、やってる内容の微に入り細に入り、じゃないような感じがします。是非、そんなつもりで、説明サイドも、今急にそう言っても困るかもしれないけれども、そういうつもりで話をしてみてください。僕の方もそういうつもりで聞いてますから。よろしくお願いをします。

それでは、まず、時間の配分を、45分ずつを配分のめどにしたいと思います。それでは、(1)のタブレットICTの有効活用について、事務局より説明をお願いします。

### 3 議事

#### (1) タブレットICTの有効活用について

##### ●教育部長

それでは、学校教育のICT推進につきまして、ご案内のとおり、お手元の資料3を御覧ください。ここにありますように、袋井市の教育情報化推進計画が昨年12月に策定されました。順次、機器の導入ですとか、職員の研修等を行っているところでございます。昨年度から進めている小学校の電子黒板、皆さん方、小学校へ訪問していただいた際には目にしていると思いますが、そういった機器の導入、全小中学校の教職員用には、1人1台校務用パソコンを配置しまして、あわせて校務支援ソフトを導入いたしまして、めんどろな学校事務の負担軽減を図るなど、教育のICT化に積極的に取り組んでいるところです。今回の会議では、まずは、1人1台で使用するタブレットの学習について、昨年度の3学期に浅羽南小学校で実施しました結果がまとまりましたのでそれを御報告いたします。あわせて、タブレット学習の今後の進め方などについても委員の皆様のお意見や御質問等をいただきたいと思っております。この詳細につきましては、所管の課長より説明いたしますので、よろしくお願いをいたします。

##### ●学校教育課長

それでは、学校教育課の加藤ですが、よろしくお願いをいたします。まず、私の方からは、浅羽南小学校でのタブレット活用の家庭学習の実践について、結果・検証がまとまりましたので、その御報告をさせていただきます。資料1の2頁を御覧ください。この「やるKey」って、聞き慣れない言葉ですが、これが凸版印刷が開発した家庭学習用

のアプリケーションでございます。これを、子どもたちが授業で学んだことを家庭学習で定着させるために活用してみるということの検証実験を行いました。具体的にこのソフトにどんな機能があるかということですが、資料の3頁を御覧ください。一つは、「レコメンド機能」というもので、これは、ソフトが1人1人に子どもに合った問題を提供する、すすめるというような機能がございます。1人1人に合った問題を出して、そのサポートのつまずきを克服していくということになります。二つ目は、「目標設定・確認機能」というものがございます。これは、1人1人の子どもが自分の目標を立てて挑戦して、挑戦した結果をすぐに確認できるという機能でございます。もう一つの機能は、「履歴確認機能」ですが、これは「やるKey」を子ども1人1人がやりますが、実践をする中で学習履歴が残りますので、それを学級担任が一目瞭然に確認することができるといえるものです。子どもたちのがんばりを承認して、やる気を引き出すことにつながるということになります。じゃ、具体的に浅羽南小学校でどのような実践や検証をしたかということですが、10頁を御覧ください。浅羽南小学校の3年生の2クラス66人を対象に、期間は平成28年1月21日から3月17日の約2箇月間行いました。内容は、持ち帰りの家庭学習で「やるKey」というアプリケーションソフトを使って組み合わせをやったということになります。そのためには、子ども1人1人にタブレットを貸し出してということになりました。そして、事前事後の確認としましては、学習内容の定着を事前事後で行ってみてその単元の学習内容の定着がどうかというのをみたということになります。具体的にどのような調査結果が出たかということですが、11頁を御覧いただきたいと思っております。調査期間や調査人数が少ないために、統計的な考察というまでには至っていないというのが検証した凸版さんの説明ではありましたが、しかし、「やるKey」と持ち帰りの家庭学習の組み合わせによって、ある程度学力向上に一定の効果が得られたという結果が11頁から載っております。具体的には、その上の図を少し見ていただきたいのですが、検証した単元と、非対象単元での比較では、浅羽南小学校と全国正答率の比較が、非対象単元の方が全国比較との差が縮小していることがありまして、一定の効果が、本当に若干ではありますがみられるということが言われております。もう少し具体的な成果や確認したことについては、大きく5点ございます。1つは11頁の下の図のところに載っていますが、つまずきを解消するドリルを活用した児童が学力を伸ばしている傾向にある。これは、学力が伸びた児童と、伸びない児童の比較では、赤く囲んだ、つまずきを解消するドリルに積極的に取り組んだことが結果として表れているということが言えます。また、学力が伸びた下位層の児童に着目すると、つまずきのドリルを積極的に取り組んでいることから、成績下位層の児童たちは、基礎の振り返り学習で、解けなかった問題が解けるようになったということが分かります。2つ目は、12頁の下の表を御覧いただきたいと思うんですが、学力が伸びた児童のモチベーションが、内発的な動機付けの比重が大きくなってきていることが見られます。これは、学力が向上した児童につきまして、事前事後のアンケートの結果から、問題を解くことがおもしろい、新しい解き方や、やり方を見つけることが楽しいというアンケートのスコアが上がってきております。このようなことから、先生や両親からの声掛けによる外発的動機付けだけではなくて、自分の力で問題を解くことの楽しさなど内発的動機付けが少しずつ変容してきているということが考えられます。3点目は13頁を御覧ください。このアプリケーションソフトの独自のアルゴリズムで問題を出し分け

をすることによって、学習効果が上がってきているということが言えます。それは13頁の上の図のところですが、従来の学級の指導では、個に応じた学習を提供することはなかなか難しい状況がありましたけれども、この「やるKey」を利用することで、確認ドリルを行った後、できる子どもには高負荷のドリルを、または、ある程度できる子にはおすすりめドリルを、または、課題がある子どもにつきましてはつまずきを解消するドリルをとということで、このソフトが、アルゴリズムによって割り出した問題を次々と与えるということで、個別の宿題をすることで、各学力差に応じた教材が提供されて力が伸びてきたということが感じられます。4点目は児童の学習履歴の把握ができることから、児童の理解の状況を把握して、授業で確認または指導すると、教師側にとってプラスの効果が現れたということです。これは、児童の学習履歴の把握ができることから、児童の理解の状況を把握して、授業の中で復習・確認することが担任としてできるということです。また、教師自身は、自分のそれぞれの授業の指導の振り返りにも役に立ったということが考えられます。最後14頁につきましては、これは、そのほかの検証でも分かるかもしれませんが、家庭学習を30分以上した子どもたちの学習内容の習熟が非常に高くなってきているということで、30分以上の家庭学習がこのような場合でも必要なのではないかということが挙げられます。それともうひとつ、具体的にこのような検証した、子どもたちや教員の声ですが、子どもたちの変容につきましては、担任はこのように話しております。家庭学習の取り組みが充実し、宿題の忘れ物がなくなってきた。または、休み時間を活用してタブレットの学習に取り組む子が増えた、ということが変容としては挙げられるということでした。具体的に、もう少し成果と課題についてということで、児童の様子では、練習問題を行う際に、個人の学習の状況にあった問題が出されるため、個に応じた力をつけることに役立ったのではないかと考えられるということです。また、間違えると、既習学習に戻ることによって苦手な問題に取り組むことができるので、苦手克服の手助けになったこと。問題の正答数によっては、ソフト上でコインを獲得することができるので、ゲーム感覚で意欲が高まったことということも言えます。教師の方は、先ほども言いましたが、教師がプリントを印刷したり、丸つけをしたりする時間が短縮できて効果的だった。子どもと向き合う時間が増えたということです。最後課題としましては、このようなソフトを利用しても、やはり教師や保護者が付き添って、見届けをしたり声掛けをすることはとても重要だということは、検証した中でも実感をしたという話があがっていました。以上、私の方からは、浅羽南小学校での取り組みの様子や結果について御報告させていただきます。以上です。

#### ●教育企画課

それでは、タブレットを使っている様子を、短い間ですが映像で御覧ください。

(映像を鑑賞)

以上です。

#### ●市長

それでは、いま浅羽南、それと福井県の映像がありましたけれども、まず、いろんな確認の質問から、あるいはこういう問題点があるなどとかっていうそういう話から、何でもお話をしませんか。

#### ●前嶋委員長

伺いたいんですけども、浅羽南小のある学年だけ取り組んだわけですが、担任が取

り組むときの気持ち、それから保護者のその学年だけ取り組む気持ちは、どんな風だったかなど。気持ちよくやってみようぜ、というような気持ちでいたのか、ちょっと、そのへんの説明の仕方も含めて教えていただきたいなと思います。

●学校教育課長

事前に、このソフトを取り入れて家庭学習をするという、一応保護者の御了解もいただくということで、保護者へ説明する機会を学級懇談会等でさせていただいたのですが、非常に、保護者の方は、家庭学習をより充実させるという点では、大変好意的に受け止めてくれていましたし、子どもにつきましては、あまり使ってないようなタブレットを実際に1人1台与えられたのが、非常にやる気を持って子どもたちは興味関心を持って取り組みを進めたというふうに聞いています。

●市長

先生はどう？ 担任の先生は。

●学校教育課長

教員につきましても、最初はタブレットを使ってということで慣れないことでしたけれども、実際やってみて、効果が上がってくる中で、大変効果的な部分で使って良かったなというところは確かにありました。

●市長

先生は、ハンドリングする上では問題ないんだ。割と楽にできちゃうんだ。楽に生徒にも教えられる。その人は、特段経験が無い先生？

●学校教育課長

特に、これに特化した教員というわけではありません。

●市長

一般的にスマホ使ったりなんかするんだ。

●学校教育課長

若手の教員が、たまたま3年生には、30代、20代の教員でしたので、取っつきやすいとは思いますが、特に情報教育が堪能だというわけではありませんでした。

●市長

ということなのですが、他にありますか。

●前嶋委員長

全市にね、全児童に与えることができたときに、スムーズに入れるかどうか。効果が上がるものならやっていくだろうけれども、スムーズに受け入れられるかどうかということ。保護者が、ゲーム感覚でやるんだったら、これは余り良くないんじゃないかという風な受け止め方があるのかなと思ったんですけども、まあ好意的であったということで、まあ一番最初の段階はいいのかなということを感じました。

●上原委員

タブレットを使って家庭学習をするということについては、基本的には不賛成というわけではないし、それで子どもの理解度が銘々の子どもについてそれなりに上がっていったという結果があったということは、いいことじゃないかなと思います。かつ、例えば、今いろいろな学校で市の教育委員会が進めている一般的なICT、さまざまな機械を使ってというふうなことをやっている、この場合でしたら「やるKey」というアプリケーションを使って家庭学習を充実できるのではないかという企画だと思いますけれ

ども、単純にタブレットを与えて、何でもかんでもタブレットを使ってというんじゃないしに、こういうふうな効果ははっきり具体的に見えたということからいくと、例えば、家庭学習における中身の充実なり、今までやってなかったことが30分以上家庭で復習予習をすとかいうふうなことにおいて、特化して使ってみるということ、さらにテスト的にやってみてはどうか、という気はいたします。今回、家庭学習というところにポイントにおいてやられたのであろうと思いますけども、こういう取り組み方は、どうでしょうね、使用前・使用後の結果を比較して効果あるかないかというのを見てみるということは、それなりにいいことではなかったかなと思います。

一つ、僕なんかはよく分からないんですけども、例えば、タブレットを使って家庭で各児童生徒が問題を解いたりというふうにするんですけども、その評価っていうのはアプリケーションの中で自動的に○△×みたいなのが分かるのか、それともさらに先生の方で、あとでそれについて見て、画面にもありましたけど、花丸をつけてあげることができるようなものなのか、どんなもんなんでしょう。

●学校教育課長

子どもは、問題をやればすぐそれが正解なのか不正解なのか、そしてそれによって次のプリントに動く、ということで、瞬時に反応してくれる確認ができるということになります。担任が、それぞれの子どもたちの学習履歴がどのくらい進んだとか、どのくらいの時間家庭学習をしているかなということについては、学校に1回タブレットを持ってきて、1回そこで一斉送信ということで受付をして、自分のパソコンの中で確認をするという作業になりますので、そこだけは、持ってきてから履歴を確認することになります。

●上原委員

それだと、例えば50人の子どもたちが全員、最終的には全部正解を、○になったというふうなことでも、履歴を見れば、この子は3回続けて間違っ4回目ようやく正解を出せたなっていうことが分かるというシステムですね。

●学校教育課長

そうです。

●上原委員

そのレベルの差によって、その後の進めるステップを、様々に違ってあげることですね。

あと、3頁にありますけれども、難しい言葉でアルゴリズムっていう言葉があるんですが、アルゴリズムっていうのは、理解しようとするはずいぶん長ったらしい説明になってしまう言葉ですけども、独自のアルゴリズムでというふうなところの意味合いがよく分からないんですよね。児童1人1人に最適な問題を出題するという事になって、は、いいんですけども、何をもとに、例えば最終的にこの子にとってはこういう方法で正解を導きだすような計算方法がいいとか、考え方がいいとかというようなことを出すのかなあと。言葉の使い方、意味自体がよく分かっていない。

●市長

ここでいうアルゴリズムとは、どういう意味で言ってますか。

●学校教育課長

アルゴリズムは、問題解決するための手順だとか対応だとかという意味で、つまりき



があった場合、じゃあ次にどの問題に移るかというところをアルゴリズムで確認して、次の問題を提供、選択するということです。いくつも東京書籍の問題が作られていますので、それによって、今言ったように、次はどこに問題が動くかということが、コンピュータの方で計算して動き出すということになります。

●上原委員

分かりました。

●伊藤委員

なかなか、評価っていうのはね、この短期間ではね、分からないと思うんだね。ICTっていうか、このタブレットを使う目的っていうのは、基本的に教師の授業力の向上と、生徒たちの学習活動っていうか、これが楽しくなるとか、これに集中するとかっていうこと以外に無いと思うんですよね。その中で、学科がどうのこうのだっていうところまで、まだ評価いってないと思いますけど、基本的に全ての授業がこのタブレットでやるということではなくて、タブレットにしかできない、また、タブレットだから余計メリットがあるというような使い方、これが必要だと思うんですよね。ですから、今後はそこを見ていかなければいけない。例えば、英語であれば、この2番目にあるような、タブレットであれば日本人が発音するよりもネイティブなね、ネイティブスピーカーが直に聞こえるわけですよ。歴史にしても、旧所名跡がそういう画面で見られる。あるいは、地理にしても、その都市の様子が画面で分かるとかね。また、理科の実験がどうのこうのとか、そういうメリットがもっといろいろあるでしょうけども、そういったところを、例えば数学の、今言うその確認ドリルでね、上は上をを目指す、できない子はおすすめプラン？おすすめなんとか。それでそのもっと手前のあれっていうのはつまりき対象？そういったあれができてくると思います。そういったものはメリットだと思います。そこらへんを、どう評価していくかというのが、今後僕らが知りたい評価の内容です。

●学校教育課長

これから子どもたちにとってつけさせたい力っていうのは、新学習指導要領等で示されてくるものであると思いますが、そのやり方とすると、アクティブ・ラーニングという総合的な学習を、相互の学習をお互いに意見を交えて学級の中でやるという一斉授業のスタイルと、あと伊藤委員がおっしゃるように個別で調べたり個別で問題をこなしたりという個別学習と、両方をうまく学校の中でやっていく必要があるのかなあというふうに思っています。今、袋井の教育情報化計画の中でいくと、1人1人にタブレットを1台ずつ与えるということのハードルが非常に高いので、まずは、学級やまた学校の中で相互に学習ができるアクティブ・ラーニングに使えるような形の、グループ学習でのタブレットの活用を先に計画としては入れているんですが、個別に子どもたちや家庭学習や勉強をする場合は、確かにタブレットというのは効果的であるので、もし、本当にこの価格が下がって安くなってくれば、是非取り入れてやれば、教職員が問題を出したり、丸つけしたりという時間が本当に削減されるので、そういう点では、教材研究の時間に使ったり、または子どもと実際に向き合って話をしたり学習をしたりっていう時間に割り当てられるので、そういう点では非常にこのタブレットというのは個別の学習では有効だと思いますし、まず私たちはグループ学習等で使えるようなことを先に考えているところです。

●伊藤委員

どっちが先？両方並行してということ？ 確かにこのアクティブ・ラーニングなんていうのがでてくるからね。そうやってやればいいと思うんですけどね。

●市長

他にどうですか。

●豊田委員

タブレットというのは、今のこれからの子どもたちにとって、ICTとかそういうものが本当に身近なものになってくることなので、これからの子どもたちはどんどん使っていくんだろうなと思うんですけども、反面、教師のスキルの違いっていうか、それによって、というか、子どもたちも初めはくいつきはすごくいいと思うんですけども、そのうちに、もっと次へ次へってなった時に、教師それぞれの子どもに対する対応によって全然レベルが変わってきやしないかなというのがあるんですけど、一つのソフトにしても先生方の使い方によっていろいろ差が出てきやしないかなというような心配はあるんですけども、そこらはどうなんですか。教師側の、こういうソフトに対してはこういう指導がいいですよっていう、たぶん一つの例はいろいろあると思うんですけども、やっぱり先生方の声掛けや、子どもたちに与えるレベルの違いで変わるのかなあという心配はあるんですけど、どうしてもこれからの世の中、こういうことは必要なことなので。ただその、アナログも、デジタル全て、先ほど上原委員が言ったんですけども、デジタルだけに頼らずに、いろんな物を並行しながらやっていくことはとても重要だと思うので、ぱっと思い浮かべたときに実は、電子辞書というものを思い浮かべたんですね、ちょっと前まで電子辞書がありましたけど、電子辞書っていうのは時間短縮にすごくいいわけです。例えばひとつの言葉に関して、ぱっと入れればぱっと答えが返ってくる。だから時間短縮にはいいけれども、本当にこのぺらぺらめくる辞書は、そのの文字をやったことに対して前後のもっとその広がりや、子どもたちが調べたときに広がりが出てくるから、デジタルの良さ、アナログの良さ、それをうまく利用できるというのと。

●市長

それはちょっと違うんだけどね。それはどっちかっていうと、辞書って本当に必要なのっていうそれに近い感覚。豊田さんがおっしゃるように、調べる途中でなかなかそこに行き着かないからいろんなものを目にするけれども、でもその分だけ余計な時間を使っています。まあそれは、おいておきまして。基本的には、やっぱり、そんなに、いいという感じ。

●豊田委員

そうですね、子どものくいつきはかなり違うかなっていうのもありますし。

●市長

これは、ちょっと加藤さん、基本的なことですが、こういうことでいいんでしょう？どこか教科書が決まっていると。教科書が決まっているとその教科書につれて宿題が、いわゆるソフトで決まっているわけでしょ？だからそうやってやるんでしょ？これは。だから、今、南小学校の何年生かが使っている教科書だと、宿題がここのところこういう宿題、ここのところこういう宿題っていうそのソフトが作られているっていうことでしょ。そうだよ。そうすると、さっき言った、すごくレベルの高い子と、おすす

めと、つまづきと、それも分かるよ何となく。だけれども、なんて言うのかな。これ、何と何やったんですか、教科は。

●学校教育課長

これ、算数しかまだなくて。

●市長

ああ、算数だよ。おそらくね、それに類さないものがあるんじゃない？ 歴史なんか、えらいレベルの高いものと低いのでは…いやいや、僕が違うのかな。よくわかんないけど、鎌倉幕府が開きましたのときにえらくレベルの高い…だって、教科書で教えていることよりもっと高いものを要求するのかね、そんなことはないよね。

●学校教育課長

凸版さんのお話では、まず算数を、小学校、を、きちっと今作っているということで、これを提供してくれました。次は国語でやりたいと言っていました。小学校の。

●市長

あ、国語で。まだ、そういうソフトが…。

●学校教育課長

まだ中学はこのソフトが開発されていないと。数学も。

●市長

ああ、わかりました、わかりました。すみません。

●上原委員

おそらくその、短期間に、短時間に全ての教科・学年に、こうしたソフトができないというのは、難しい、一番これ難しいんだろうなど。例えば、こういう学習のアプリケーションじゃなしに、いろんな企業でやっている、例えばその会社で提供する商品に係わる周辺の知識、よくいろんなところで何とかテストっていうのがありますね。漢字テストみたいに。そういうのを数えたらたくさんあるんですけども、私がいたハウス食品では、香辛料の知識について会社員全員がテストを受けなきゃいけないですね。そういうのってね全部選択方式、四者択一みたいなので、全部こうぼんぼんぼんぼんと選んでいって、最終的には80点であなたは不合格ですとかでるわけです。そんなようなタブレットの活用っていうのは、早い話、何にもならない。算数でできているっていうのは、おそらく、そこの計算の仕方が、例えばここの4頁のところのかけ算の筆算ってありますね、筆算できちっとできているっていうふうなことがベースにあって、暗算もできるし、それからその選択してこれだっていう正解を選べるっていうふうなことに導いていくようなアプリケーションだと思うので、算数なんかの場合は、このアプリは作りやすかったんだろうと思います。だから、そういうふうな中で、例えばこの算数で、かけ算の演習をタブレットで実際に子どもたちがやったとして、画面の中で選択するだけなのか、間違っただけからもう一回選択しなおすという繰り返しのか。そうじゃなくて、画面の中で鉛筆かポイントペンで自分で筆算の式を書いてみて、答えはこれだというふうに解答して正解か不正解かっていうようなことを演習の中で繰り返せるというパターンプログラムなのかっていうことにおいて、いろいろね、利用価値っていうのは変わるんだろうと思うんですけども。例えば今回浅羽南でやったタブレットの画面というのはね、見てないので分からないんですけども、単純な何者択一方式なのか、画面の上でも計算しようと思ったらできるもんなのか、どんなもんなんだろう。

●学校教育課長

すみません、自分も実際に物がなくてあたっていただけではありませんが、先ほど言ったここの筆算の式が書いてある。このように、ペンがあったかどうか分かりませんが、タブレットに手書きなどで、実際に数字を入れていくとか計算をするというようなことを繰り返してこういうのをやるようになっていて、ただの選択式で、四択だというものではありませんでした。

●前嶋委員長

例えば、三位数かける二位数の計算を学校でやったとします。そうすると、それを宿題に出します。そうするとできる子はできます。けど、できない子は何をどうしているか分からない。そのまま家に持っていっても、くしゃくしゃとやって持ってこられ、という宿題のやり方だったら力はつきませんよね。何も。やり方が分からない。でも、例えばこのかけ算の筆算で、三位数かける二位数ができない。

●市長

三位数って何。

●前嶋委員長

「719」。三桁の数。その、三桁かける二桁ができない。なので、今度は二桁かける二桁の計算になっている。でもその前に、4の段ができない。4の段のかけ算ができなかったらできないですよ。そうすると、一段目の4の段をやっていく。そうすると部分的に繰り返り上がりがある。シクサンジュウロク、3あがるとかって。そういうふうにやっていって、一の段のかけ算ができ、次は1かける9ですよ、1かける十の位。そして最後は足し算になったとき、空位のゼロゼロがありますよね。そういうものが、きつと四角にできていて、そこが違っていると、ブブーとか何か言うんじゃないかなと思うんですよ。そうするとそここのとこで、え？なんでこうなるんだろう。あ、そうか、3があがっていなかったんだ、っていうようなものが自分で分かっていくような手順になっているのではないかなと思うんです。そうすると、その手順が分かってくると、なんだ、二位数かける二位数ができるから、じゃ、三位数の今日の宿題に入ってみようというふうにやっていくと、あ、今日の授業でやったのが分かった、という、魅力ある学校のあれじゃないですけども、それにつながっていくものではないかなということ、この例のかけ算の方で示していると思ったんですけど。だから、宿題って絶対学校だと分かったような気がしちゃうんですよ。分かったような気がするけど、1人になると分からなくなる。でも、家で答えだけ教えてもらっても、何の力にもならない。その点、この一番何とかがんばろうと思っていた子たちが、ちょっとずつそれで分かっていく。だからこの時間が30分くらいかかってしまう。そこなんじゃないかなと思ったんですよ。そうすると、もしもこれを本当に真面目に取り組んでいけば、着実に力がついていくのではないかなという。

●伊藤委員

真面目にやればね。基本的にはそこなんです。ただ、さっきあったように、確認ドリルっていうのを全員やってみればいいですよ。いわゆる復習ですよ、これ、全員の。そこで分かなければ、その、つまづき解消プラン？ だからそういうのがロジックに、もうなっていると思うんですよ。エクセルの関数と同じですよ。あの関数というのは、そこが間違っているというのは出ませんよね。全体が間違っているとエラー、ま

あエラーも多種類あるけど、だからそういうところに、今、前嶋先生がおっしゃったようにね、次ここをやって間違ったら、ここが間違っているというのが出ると思うんです。その段階が。ただエラーじゃなくて。ここが間違っている、というね。だからいいと思うんですよ、真面目にやりさえすればそういう問題はどんどんレベルアップしてくるんじゃないですかね。その子のね。

●市長

そうか、算数だけなんだ。

●学校教育課長

資料3の一番後ろに、一番後ろ裏面なんですけど、浅羽南小でやったものと同じタブレットの算数の家庭学習を、浜松市がこの9月から3小学校でモデル的にやってみるという実証研究に入るというのが新聞に出ました。ここに載っている、ちょっと見にくいですけども、問題、これが子どもたちのタブレットの画面になります。式を作ってみたり、答えを書いてみたりっていうところがこういう画面で、問題が提供される。

●伊藤委員

庄内小や犬井小に行ってみればいい。

●学校教育課長

そうですね。うちの浅羽南と同じことを、それぞれ3小学校で実践をしていくということになります。タブレットは、自治体の方で子どもたちにまずは与える、提供するということでした。

●市長

ソフト込みで、いくらぐらいするんですか。量にもよりけりですか。

●学校教育課長

すみません、ちょっと経費的なことまでは承知しておりません。

●市長

わかりました。じゃあ毎日、浅羽南小、毎日、算数の時間があるのですか。小学校では。

●学校教育課長

週に4時間ぐらいですので、毎日ではない。

●市長

そうするとね、算数のない日は宿題は無いんだ。タブレットのような宿題は。

●学校教育課長

それは、学級での担任の与え方次第ですので、毎日少しずつやるっていうこともあるだろうし、授業が終わった後に確実にというところもあると思いますが、ちょっとすみません、そこまで把握してなかったです。

●市長

ああそうか、授業がなくても算数の宿題ってあるんだ。学校ってそう？

●豊田委員

昔、ドリル。ドリルとと漢字は毎日。

●市長

授業の後やるんじゃないんだ。これは僕が間違っていましたね。そうすると、毎日、使う人は使うんだね。そういうことだね。これで、加藤さんね、優れているというか早

い子は簡単にこの宿題、終わっちゃわない？たぶん。あつという間。そうでもない？

●学校教育課長

できる子はできる子なりに、高負荷の問題が選択されるようになっているので。

●市長

その辺がよく分からないんだけど、算数で高負荷って、教科書でいったらもっと先の方に進んじゃわないかね。そういうことはないですか？

●学校教育課長

一応、分かりやすい問題から、少し難しい問題にということで、少し負荷をかけるような問題構成をしてあるということです。

●市長

わかりました。時間の方があれなんだけれども。基本的には、これ、教育長はどう思いますか。

●鈴木教育長

一番のポイントは、おそらく、僕は小学校の教員経験が無いんですけども、宿題というみんな同じだった。書き取り何ページとか、この計算問題とか。ところが、この、今、試行を始めたのは、宿題がみんな違うということです。自分で選べる。これ、最近では、アダプティブ・ラーニング。アクティブでなくてアダプティブ、その子に応じた宿題。これが実は画期的なことで、今まで何でできないかっていうと、教員がとても、そのばらばらな宿題を集めてチェックしてまた返す、1人1人に違う課題を与えるのは無理だと。ところが、このタブレットという道具でアダプティブの宿題が、いわゆる公文式みたいな、その子に応じた宿題が出る。これで一番恩恵を受けるのが、今できない子が本当は一番恩恵を受けなきゃいけない。苦手な子、今までおいていかれた子たちが、これでおいていかれない、とにかくついていけるっていうことが、一番ここがポイントだと思います。できる子たちに関して言うと、これはいくらでも難しくはできるものだから、それはいくらでもソフトになる。でも一番大事なことは、あやふやな子たちがあやふやな部分を解消できるとすれば、これは最大の効果。もう一つはですね、これの、だから、アダプティブというところが非常に大事なことなんだけれども、考え方として、授業ってアダプティブな個別学習だと思うんです。授業ってのはみんなでやる。そのときに、タブレットは、みんなで学習したときにどういうふうに使えるかという。タブレットが個別学習では非常に有効だということは、今回の報告で皆さんも理解している。じゃあ教室で使うタブレットって、1人1人に？ 30人も集まって別に、1人1人やる必要ないじゃないですか、ドリルだって家でやりゃあいい話ですよ。そこのところにタブレットの、実は僕らも、みんなで勉強するのにタブレットは本当に何ができるのか、どういう機能があるんだろうかっていうことはなくて、いっぺんに全員に教室で使うことについてちょっと躊躇しているところがある。ところが、宿題に関して言うと、もう今日からでも全員に持たせた方が、いろんな意味で効果があるんじゃないかなと思って。そのへんのところで、タブレットっていう道具に、機械について議論することと、家庭学習がやっぱり基本的に個別学習である。で、教室は、みんなで作る。

●市長

そりゃあ極端なことを言えば、みんなで作るときに、タブレットなんかいらんよね。こういう意味ですか？

●鈴木教育長

そう、ある意味で、それが無くても今までやってきたし、ただ、じゃあ、有効にタブレットを使うとすれば、どういう。それがアクティブ・ラーニングって新しい潮の流れでどういう風に使えるかっていうのは、ちょっと僕らも経験が無いので、もうひとつ理解ができていないところがある。その点が、非常に大きなポイントじゃないかと思えます。だから、個別学習として家庭学習としては、僕は、非常に有効な道具じゃないかなと思います。

●市長

家庭学習だけだと、何となくあれなんだけれども、そののところどうなんですか？  
今、教育長が言った。

●学校教育課長

これも、資料の2のところ、タブレットの活用の仕方が書かれています。Bの個別学習と、Cの協働学習というところで、今、教育長が話した内容に移るわけですが、この中で、個別学習のBの5が家庭学習として非常に利用価値が高いし、授業の中では調べ学習等に効果的だというふうに考えて、Bの1のような使い方になるところです。あと、じゃあ協働学習、教室の中でみんなで話し合ったり何かをするとき使えるかっていうときには、意見を集約したり、1人ずつタブレットに入力したものを、ぼんと集中画面で集めてみたり、また、お互いに考えている内容をまとめて一つのものに作り直してみたりというところは、効果的じゃないかというふうに言われています。

●市長

電子黒板が、これで小学校が、今年度中に全部入るんだよね。だから、それとのあれができるのかなあ。それは、加藤さん、できますか？

●学校教育課長

そうですね、電子黒板の方にタブレットの内容を飛ばすということは可能になってきます。

●市長

なるほどね。

●鈴木教育長

先ほど、報告にもあったように、家庭学習30分というのは、本当に意味がすごく大きいと思います。授業は、基本的には毎時間新しいことをやります。能力がある子たちは、新しいことを次々と吸収していく。ちょっと理解の遅い子たちは、授業で復習の時間って十分にとれない。定着した力が学力です。ですから、授業って復習が苦手なんです。そうになっていくと、家庭学習ってその、遅れてちょっとついて行くのが大変な子にこそ実は充実させる必要があるんですよ。それが、さっき言った、タブレットは新しい授業の形態からして、まだいろんな可能性もあるし、でも、その遅れていく子たちを考えていく。あるいは、不登校の子たちとかですね、今、ひまわりに通っている子たちとかですね。そういう、個別学習が必要な子たちには、僕は一番有効だと道具じゃないかと思えます。ただ、もちろん、今言ったように、教室の中で使う可能性っていっぱいまだこれから出てくるでしょうし。

●市長

今のはおもしろいよなあ。おもしろいって、私は、今、教育長が言ったあの個別ね、

個別学習、いわゆる能力に応じた。よく私たちは同じクラスは同じレベルにしていくじゃないですか。それが、個別、進んでいる人と遅れている人っていうのを、ある種、これを整える、一緒にしようということに相当な無理も生じるし、その教師がエネルギーもすごいなあ。私が、少なくとも、えらい昔だけれどもアメリカで経験したときには、うちのかみさんだっけ教室に入って、算数の遅れている子どもたちを後ろの方で教えている、5、6人。前の方は前の方で、先生がこれやって、だいたい少なくとも僕の知る限りで、6つくらいの5、6人のグループに分かれてっていうことが、普通の授業の進捗でもやってましたね。同じようなことを今度ね、宿題でやるわけですよ。私は、そのことが、後れている子にも親切だし、ただね、よく日本である、違いを、何もかも同じでなくてはいかんと。よく運動会で、今はそんなことを言わないかもしれないけど、同時にゴールインしないと不公平だよなっていうね、そういう話じゃなくって、遅れている子どもにちゃんと教えて、キャッチアップするように努力させるっていうのが、僕は親切なことだと思いますんでね。そこのところは、先生の認識、教師の認識と、それから、家庭の、親の認識も必要。なんかうちの子どもが、いつも簡単な宿題ばかりやらされてって思うかもしれないけど、でもそれはある種、客観的なデータで、だけでもステップアップすればいいんだよということであれば、そういうこともある程度僕は必要なことかなって感じはするね。それはなかなか、教育現場で言いにくい話かな？

●前嶋委員長

でもそれがね、1人1人がわかる授業。学校が楽しくなる1つの原因になっていく、原因というか、とっても大事な原因ですけど。

●市長

だよ、と思うんだけどな。あんまり、加藤さん、そういうことはあんまり最近教師は気を遣わない？ いわゆる、僕の言ったのは、遅れている子、進んでいる子に識別。宿題で明らかに識別するわけでしょ、Aコース、Bコース、Cコース。それはあんまり気にしない？

●学校教育課長

小学校では、習熟度別の算数の授業はもう定着してきていますので。

●市長

あ、やってるの。それは失礼しました。はい。

●学校教育課長

ある程度、御理解はいただけると思います。

●市長

あの、この件いい？ いわゆるタブレットを使った、少なくとも算数の勉強っていうことで、浅羽南で一定の成果が得られた。これを広めていきたいと思いますっていうことで、今から考えていくと。これはやっぱり、壁のひとつはお金の問題もあるし、それから、まあ・・・お金かなあ・・・お金以外・・・。お金で解決しちゃう？

●学校教育課長

あと、管理の問題をどうするか。子どもが家に持ち帰っていったとき、故障した場合だとか、無くした場合だとか、まあ、お金に係わることですが。

●市長

それはお金じゃないですか。いいでしょう？ まあ、そりゃあ、故障することもある



し、無くすこともあるっていうことは、ある種、危険負担で当然だよ。他に何かこれ。

●鈴木教育長

あとは、授業の中で教員が使いこなすのに、どういう風に。もう機械買っちゃって、使いなさいって言うのか、少しずつ先生方に、まあさっき言った、グループに1台ぐらいずつ持たせて、先生方に使い勝手。これ、あと、インターネットに当然つながってきますので、タブレット。そうするとまた、汎用、使う危険が伴ってきます。そういうことも含めて、先生方にどういう風に使いこなしてもらおうかっていう課題は大きいと思います。

●市長

ですよ。今度、先生のICTのスキルの問題が出てくるね。

●鈴木教育長

ほっておいて、先生方のスキルが上がるわけじゃないもんですから、手元にその道具があって初めて、使いながら習熟していくっていうことになると思います。

1人1人が調べて、それをグループでまとめて云々にしても、先生方もそういう授業にそう慣れているわけじゃないもんですから。

●市長

よろしいですか、ひとまず。はい、じゃあ次にいきましょう。ICTの問題は結論出して云々というよりも、こういう感覚をまずもってもらって、はい。

2つ目の議事は、英語教育と市民の英語力、このことについて、事務局から説明をお願いします。

●教育部長

それでは私から、お手元の資料4を御覧ください。袋井市のグローバル人材育成についてということで、そこに現状が載っております。学校教育の中では、市の中学生の英語力が国のレベルを下回っていると、それから2020年には、小学校3、4年生に外国語活動と、5、6年生には英語科の授業が始まるということがあります。さらにその学校教育の枠を超えて、まちづくりの視点というか、そういったことから捉えますと、2019年には、ワールドカップの開催と、これによって、英語圏の外国人の皆さんがたくさん本市にも訪れるというようなことが見込まれております。さらには、2020年からは大学入試で英語の4技能、そこにあります、話す、聞く、読む、書く、こういったものが重視されるというようなこともあります。またあの、ここには書いてないですけども、当然のことながら、経済的にもグローバル化は進んでおります。そういったような背景があって、本市の学校教育の英語教育をどのようにするかということで、2つ目の四角ですね、袋井の南中の学区ではですね、小学校の低学年、これは袋井の南小と高南小、2校となりますが、ここで、外国語活動による英語力の優位性が検証されております。これは以前、教育委員会の中でも処理させていただいたものです。2020年から始まる新しい学習指導要領、これを先取りした形でですね、英語教育推進4か年計画、後ほど説明をさせていただきます、これを策定しまして、小学校1年生から英語に親しむ教材などの導入をさせていただいております。さらに今年度からは、この夏休み、イングリッシュ・デイキャンプで三川小学校5・6年生中心に。それから英語検定の受検を推進しまして、検定料の一部を補助するという形で、小学校6年生から中学校3年生まで、能力を高めるということにも努力しているところでございます。その下に、それぞれの課

題ということで整理をさせていただきました。1番目に、学校教育における英語教育の強化ということで、これは新しい学習指導要領に、ここに示したとおり内容がそれぞれスタートしますので、これに乗り遅れないようにするにはどうしたらよいかということで。2つ目に、教員の英語力、英語指導力の向上をどういう風に展開していくか。それから4番目に、2020年から小学校の授業時間数が増えるということで、3年から6年までの時間ですが、その右隣へいきますと、各学年ともにですね、週1時間、45分の授業数の増、それをどう工夫していったらいいかということ。裏面にいっていただきまして、それ以外にも、英語が話せる人材の発掘とか、英語の4技能の向上させるところの部分でのさまざまな課題があるということがございます。それから、真ん中より少し下、本市のまちづくりにおける英語教育の特徴ということでございますが、一部の公民館等ですね、すでに、英会話などの教室を行っております。それから、ラグビーのワールドカップの開催にあわせて、民泊家庭ですとか、案内ボランティア等の要請が必要ということで、これは、今すでに取り組み始めてはおりますけれども、そういったことがあります。あわせて、このラグビーワールドカップ、ある意味一過性のもものではございますので、それが終わってからのグローバル化への対応はどうしたらよいかということも考える必要があるかと思えます。市民の英語力の向上の課題・取り組みを下の表にまとめさせていただきました。市民が英語に慣れ親しむ場をどう提供していくか、人材の育成もそうです。さらには、英語力の向上を図るためには、やはり、早いうちからこういった活動に取り組むということで、小学校のみならず、幼児教育の段階からですね、英語に親しんでいくというようなこともこれから取り組んでいく必要があるのではないかと。さまざまな課題がございますが、いまこのくらいのことで検討を要するものでございます。それから、資料4の3頁以降につきましてはですね、学校教育課長のほうからまた、詳細を説明させていただきたいと思えますが、1つ目の検討事項というかですね、小学校でこれから新たにスタートするその英語教育の推進について、この進め方などにつきまして、本市独自の英語教育につきまして、皆様方から御意見をいただきたいと思えます。2つ目は、市民の英語力の向上ということで、地域の人材の育成、発掘、そういったようなことについて、具体的に考えられることなどについて、皆様方に御意見をいただきたいと思えます。もう少し細かい説明を、学校教育課長から御説明いたします。

#### ●学校教育課長

それでは、お手元の資料4の4頁を御覧ください。今、部長の話がありましたように、昨年度、学校教育課では、グローバル人材の育成についての検討をしてまいりました。その中で、中学校3年生の英語力がどのようなものかということで、アセスメント調査をさせていただいた、その結果が、今言われたような結果が出てきたということです。悲しい、つらい部分の結果もありましたが、逆にあの、私たちにとっては驚きもありまして、小学校の低学年から英語活動を進めてくるのが中学校3年の出口のところの英語力を高めることにつながってる、逆にこれを袋井市の特徴にしていけないかどうかというふうに考えました。そのようなことを含めて、これからその、新しい学習指導要領に変わっていく4年先に向けて、どのような計画が立てられるかということを考えてまいりました。5頁を御覧ください。本市の今後の英語教育の充実につきましては、小学校の充実した外国語活動や英語学習が、中学校での確かな英語力につながるってということだとか、今言った平成32年度の新学習指導要領の完全実施に向けて、平成30年度から、

国でいう先行実施が可能ということも含めて、円滑に移行できるように、市として準備を進めていきたいと考えております。また、さらにラグビーワールドカップの開催を契機として、子どもたちの英語力の向上の気運も高めていければと、このようなことから、次のような内容で考えてきました。まず、本市のグローバル人材の育成や英語力の向上の方針につきましては、新学習指導要領の円滑な移行のための研究を進めていきたいというふうに考えております。新学習指導要領の実施に伴って、小学校中学年では年間35時間、そして高学年では年間70時間の授業時数が必要となってまいります。そういう点で、いまある教育課程上の授業時数プラス35時間をどう生み出すかというところがひとつの課題になってきていますので、これにつきましては、小学校の低学年から新教育課程の中にどのように入れていくことができるか、小中一貫、小中連携の取り組みとともに、英語力の向上を目指した教育課程の編成を検討していきたいと考えております。6頁を御覧ください。6頁に書いてあります、小学校の外国語活動の3・4年生以下への早期導入についてであります。これは、先ほど言いましたアセスメント調査の結果から、英語に親しむことが小学校1年生から有効であるというふうに考えられますので、本市では、小学校低学年から、先ほど言いましたように教育課程上の工夫をしていきたいと思っております。次は、教員研修の充実ですが、特に小学校には英語の専科教員がない状況がありますので、そういう不安を少しでも払拭するために、小学校教員の英語力や、英語指導力の向上を、研修の中で計画的に身につけさせていきたいと考えております。しかし、教員の負担増だけを強いるものにならないようにするためには、市の予算での人的配置などをあわせて検討していかなければならないと思っております。次に、ALTの有効活用についてですが、ここについては、現在袋井市で実践的なコミュニケーション能力を高めるために小学校に2人、中学校に4人のALTを配置しています。現在小学校においては、学級担任とALTが協力しまして、より児童にとって学びがよい活動の仕組んでいます。今後は、小学校での、先ほど言いました低学年での外国語活動や、5・6年生での英語の教科化なども含めて、授業時数が小学校では極端に多くなりますので、ALTの配置人数を大幅に増員していく必要があると考えています。続いて、ICTの機器の利用についてですが、ここについては、小学校、特に低学年では、10分から15分くらいの短い時間での英語学習、英語の活動について考えていく必要がありますので、柔軟な学習形態の導入というふうに考えています。この中では特に、映像を伴うデジタル教材が開発されていますので、それが使えるようにということで、今、各学級のほうに整備しています電子黒板機能付きプロジェクターが活用できると考えています。このようなことを私たちは、グローバル人材の育成に向けてはポイントを絞ってやっていきたいと思っておりますし、これをより具体化するために4か年推進計画を作りましたので、そちらをちょっと御説明させていただきます。7頁を御覧ください。4か年の推進計画の目指す目標値としましては、中学校を卒業するときに、英検3級以上の力をつけている子どもたちの数を、国は最初50%という話をしていますが、少しでも多くということで、最終的には60%を目指していきたいと考えています。そのために、まず1つ目としましては、児童生徒の英語検定の受検の支援事業をしていきたいということで考えています。資料では18頁を御覧いただければと思います。この事業は、小学校高学年から中学生までが、目標を持って意欲的に英語の学習に取り組んだその成果を、自分で英語検定で試してみると、そして、さらなる意欲化につなげていきたいというふ

うな事業です。具体的には、受検料の一部を市が負担するというので、児童生徒が5級、4級、3級、準2級というものを受ける場合には、千円の負担だけで、あとは市が補助しますよということ考えています。具体的に本年度は1月に英語検定の支援事業を実施していきたいと思っています。今年初めてですので、まず1回1月でやってみますが、来年度はどういう形がいいかまた検討していきたいと思っています。2つ目は、先日まで行っていました「イングリッシュ・デイキャンプ」の事業です。この事業につきましては、小学校5・6年生を対象に、英語を使う楽しさを実感させて、英語を学びたいという意欲化を図るというものです。6年生は2日間コースをセッティングしましたし、5年生については1日コース。なお、6年生、5年生のコースに兄弟関係で2年生や3年生、4年生の子どもたちも混じってコースの中では活動していました。この中で、ALTで委託契約をしているところの外国人に来ていただいて、英会話の体験をする集中講座を実施しました。大変好評な形で、来年度も続けていけると実感をしています。3つめは、英語のDVD教材を活用した、小学校低学年からの外国語活動なんです。こちらは17頁の資料を御覧いただきたいと思います。17頁に資料があるので、ちょっと資料の色が悪くて申し訳ありませんが、平成31年度にラグビーワールドカップがありますので、その時に中学生2年生、3年生が、できれば外国人のおもてなしで、英語を使った案内が少しでもできるようにということも目標にしながら進めていくには、小学校低学年からということ考えています。その、小学校低学年の中でいきますと、段階を追って教えていくことにはなりますが、特にここでいきますと、英語のDVD教材を利用してということ、先ほど言いました大阪府が短時間の10分から15分の授業の中で子どもたちに英語に親しむ教材を作りましたので、それを購入して、今、9月に小学校でおおむね電子黒板付きプロジェクターがそろいましたし、残り3校についても、補正予算に組まれていきますので、今年度中にはどの小学校でも活用できると思います。10分から15分の単位の教材が105時間分用意されていますので、週のうち、朝の時間もしくは帰りの会の時間等利用しながら、できるだけ利用していきたいと思っています。4つめの英語力向上のための職員研修については、資料の21頁に内容が載っていますのでそちらをまた御覧いただければと思います。5つめは英語教育の推進プロジェクト委員会ですが、先ほど言いました新学習指導要領が平成32、そして先行実施が平成30年というところの移行がありますので、そこに向けて準備作業を進めていくためには、プロジェクト委員会を設置し、大学の教授もアドバイザーに迎えて、準備を進めていきたいと思っています。本年度立ち上げましたので、今年準備の計画を立てて、来年度以降、準備のほうを計画に進めていきたいと思っています。以上が、アセスメント調査を入れての今後の計画であり、また、具体的に、4か年の推進計画を組ませていただいて、本年度から少しずつ動き出しているということで、御説明させていただきました。よろしくお願いいたします。

●市長

はい、ありがとうございました。今の説明で、どちらか言うとあっちのほう中心、学校の教育。あと、社会教育の話もある？もうこれで終わり？

●学校教育課長

はい。

●市長

じゃあ、これで説明終わって、学校の話と、それからそのほか学校以外の話と、英語力の向上、両方、どっちでもいいですから、何か今、聞いたりあるいはいろいろなことで質問や意見などありましたら。どうぞ。

●伊藤委員

小学校における英語教育ということについての質問ですけども、今お聞きした、英語4か年推進計画という中に、小学校というのがたぶんあると思いますけど、これ、もうやらざるを得ないわけですよ。文科省のね。云々言ってる場合じゃないんで、袋井市の英語の学力が低い、ということに立った4か年計画の推進、これでいいと思うんですよ。で、その中に問題点として、その教師不足だコマ不足になってくるわけですよ。他の教科のコマ削ってでもそっちに向けないという課題がでてくるわけですよ。英語の時間が増えるわけでしょ？コマ数が増えるわけでしょ？

●学校教育課長

他の時間の授業時数を削って英語に振り分けることはできないので、上乘せをしていくしかないです。

●伊藤委員

そうなってくると、今度は大きく考えれば、土曜日就業とかね、そういった問題も出てくるじゃないですか？ まあ、そこまでいなくても、ですから、そういう推進計画4か年をやってく中で、問題点だけ市長に定期的に報告するという評価がね、必要になってくると思うんですよ。それはもうそれでいいと思うんです。小中学校における、僕は、英語のあれっていうのはね。問題は市民なんです。市民はだいたい、必要性がなかったら英語なんかやりませんからね。市民が勉強のためにとってやってるのはいるかも知れないけども。そういうところをやっぱり、小学校の英語をやり始めるときと同じなんだけど、そういう、必要性っていう、なんで英語をやる必要性がでてくるのかという、一番初めから言えば、社会人でも、小学生でも、市が目指すグローバル像、グローバル人材像を、一番はじめにね、議論しないと。僕は、学校の教科だ何だ、それはもう4か年のあれでいいと思うんですよ。例えば向上のその推進計画4年でね。いつもそうなんだけど、やはり、やる目的、さっきのICTのタブレットだって全部手段ですよ。何が目的かっていうことですよ。そこをはっきりさせないと、ここで、教科のあれがどうのこうのとかね、じゃここで英語のあれがどうのこうのってやってても、総合会議にならんわけ。袋井市が目指すグローバル人材像、ここに書いてありますが、書いてあるたって、その、言語学者や文化人類学の学者がみりゃあ、他の国のことなんか詳しく分かりませんよね。だから、余計に必要性、じゃあ会話力だけでいいんだと、おもてなしのために会話力だけ身につけようやっていうことで、袋井市民が全員やるのかね。今更、文法も何も無いわね。あら、そのために英語をやるのか、やっぱりそのためにはグローバル知見をいうのを持たないとね、そういうところから始めていかないと。じゃ、英語が必要になってくるね、じゃ、会話だけでもやるよ、とかね。おもてなしが、小学生、中学生も大事ですけどね。親子で学ぶとか、じいちゃんばあちゃんも「ハロー」ってやる、そういう市民の英語のあれなのか。

●上原委員

伊藤さんのおっしゃることはよく分かります。あの、よく使われる言葉で「グローバル」っていう言葉の意味がね、人によってまちまちな理解があるのかも知れないし、こ

この資料4にもある袋井市のグローバル人材ってどんな人材？って聞かれたときに、全員が同じように答えられるようにしておいたほうが本当はいいんですよね。例えば、グローバルってのは、天体としての地球のことをいうんだけど、なんて言うか、世界、世の中の、国際的なこと、何でも言うとか知っているとかいうことじゃなしに、伊藤さんの言われること僕も賛同するけれども、自分の言いたいこと、それから自分たちのまちのこと、自分たちのまちの自慢でも何でもいいんだけど、それを海外から来た人であっても、ある程度、ちゃんとお話ができる、伝えられる、もしくは、もてなしとして自分たちの考えを分かっていたかための一つのツールとして、市民の、例えば英語力とか、外人さんに対して違和感を持たないような気持ちとかっていうふうなものを育ておくのは必要だと思いますね。そういう意味では、英語の文法を習うとか、スペルをたくさん覚えるとか、何かのテストを受けるみたいなことは必要ないだろうなと思います。そういう面では、例えば、よその自治体なんかでもやっているように、幼稚園単位の、小学校低学年から英語習ってますとか、教えてますとかっていうふうなことはお話は聞くんですけども、実際に何を教えているかは僕もよく分からないんですが、僕自身が中学校なんかで習ってたときの経験からいくとですね、例えば、リーディングとグラマーと2つあって別々に習ってたんですね。大失敗だろうと、今でも思っていますけどね。今考えたら、外国で仕事をしたときもそうですけども、会話ができりゃいいんです。そういう意味では、例えば、ペンを持ってきて「これはペンです。」って教え方は、全く必要ないんです。犬を見て、犬の絵を見て、「ドッグって覚えなさい」って覚え方は最低だと思うんです。そんなことよりも、例えば、「家には犬がいます」っていう文章を覚えるとか、「家のお父さんの仕事はこんな仕事をしています」とか、「あなたの行きたいビルディングは向こうの方、300mくらい先にありますよ」とかっていうふうなフレーズを、たくさん言えるような会話の練習っていうのが有効だろうと思います。発音も重要なだろうと思うんですけども、とんでもない発音でなければ、だいたい通じるというふうには思いますね。基本的に、日本の英語の先生の発音は信用ならないところが大変ありますので、それよりも、今言ったようなフレーズをね、できるだけたくさん。というのはなぜかというね、アメリカ人の赤ちゃんってね、文法なんか習わないですよ、試験も習わない、だけど英語がしゃべれる。そういう面から言うとやっぱり会話ね、「お母ちゃん、なんか食べたい」とかね、「パパおかえりなさい」とかっていうふうなことを言えるレベル、そういうようなことを、市民としても、また低学年の子どもたちが習う英語の第一歩は、あるべきじゃないかなっていうイメージは持っています。

#### ●前嶋委員長

上原さんはグローバルな人間なので、いつも温かい雰囲気、ああこうなったらいいなということを感じて、いつもお話を聞かせていただくんですけども、先日、中学校の訪問に行ったときに、ALTが4名いらして、その4名の人のところに1人ずつ子どもたちがいて、そして「マイネーム イズ」から始まって自分は何をやっているという、本当に今言われたような日常的な会話のフレーズを言って、そうするとALTがフンフンと聞いてくださる、それで、子どもたちは緊張するし、満足感を得たと思うんですよ。そういうようなことで学んだ子どもたちは、英語って楽しいとか、もうちょっと学びたいなっていう意欲につながるんじゃないかなと思います。その英語を、日常的会話のものを覚えた子どもたちが、小学校に来てやってみるとか、公民館へ行って高

齡者のところに行ってやってくるとか、そんなことをしたらもう、なんていうんですか「This is a pen」じゃなくてね、そういうようなことをやってくることによって、子どもたち自身のおもてなしの仕方が身につくようになっていくと。中学校で楽しく親しむ、小学校も楽しく親しむようなカリキュラムの作り方っていうんですかね、そういうようなものが、生きた日常会話が使われることが大切かなということを感じます。それが全部、小学校教員の負担になっていったら、これは楽しい英語じゃなくなってしまうので、負担を感じさせないようなフレーズのものでスイッチオンで出てくるのか、それとも、その画面によっていつも「モーニング」から始まって行って、そういうようなものが毎日流れているとか、そういう工夫ってというのが、それこそ伊藤委員が言われたように親しむことによって、それが日常の英会話になっていくとありがたいなと、そんな希望を持っています。

#### ●伊藤委員

僕は、小学校の英語ってというのは遊びでいいと思うんです。それと、この大人のあれもね、遊び感覚でいいと思うんです。

#### ●豊田委員

今の子どもたちがやっている英語ってというのは、結構100%を求めるような英語が多くて、どうしてもそうすると子どもたちは、ああもう嫌ってような感じに、どうしても英語から離れたりするんですけど、あるアメリカの外人に聞いたときに、あなた日本語しゃべりますか？って聞いたときに、「OK、しゃべれる、しゃべれる。スシ、天ぷら」とか、単語が出てくるわけですね。でもそれでも、その外国の人たちは日本語しゃべれる、と。でも日本人がそう言ったら、英語しゃべれるかって言ったら、本当に完璧にしゃべれないと「英語がしゃべれない」というふうにとられがちなんだけども、別に単語を並べるだけでも、結構コミュニケーションはとれるかなっていうふうに思います。よくうちの主人が、今、中国の留学生とかが来てるもんですから、家に連れてくるんですよ。私、全く英語が嫌なので拒否するんですけど、でも単語を少し並べるだけで結構通じたりもするので、あ、こういうのがコミュニケーションなんだな、こういうのが必要なんだなということを見ると、小さい頃から少しでも英語というものが耳から入っていれば、嫌だって言う気持ちはなくなるのかなと思うんで、やっぱり早い時期に、さっき言った10分から15分ぐらいでもいいから英語が毎日耳に少しでも入れば、英語離れはしないかなと思うので。私たちも、しゃべる、そういう機会がなかなかないと、英語って入ってこないですけども、少しでも、日本語混じりの英語でも、結構通じたりもするので、そういう経験って必要だなっていうふうに思います。

#### ●市長

教育長、どうですか。

#### ●鈴木教育長

最初に、伊藤委員からあった、何のために英語をやらなくちゃいけないかっていうことってというのは、実は、市民だけじゃなくて子どもたちにも、学習指導要領はもう小学校3年から、とにかく日本人、英語を少しでもしゃべれるようにしたいっていう、ノルマみたいに中3で英検3級60%とかっていう、でてくるわけですね。そういう中で英語をやらなくちゃいけないんだけど、一方で、この英語政策に関しては、シンガポールかマレーシアで働くユニクロの店長を1人作るために、英語を使うことのないクラ

スの30人に英語を強制するのかっていう議論もあって。じゃあ、どれだけの人間が、英語を使って仕事をするのかって、今後を含めてですね、そう考えていったときに、実は、英語について疑問を持つ人もいるんですが。ただもう学校としては、新学習指導要領がそういうことを求めている。大学入試がもう、話せないとこれからはやっぱり通用しなくなってくるので、これはもう、学校教育としては、全力で取り組む。ですから、先ほどから申し上げたように、いろんな施策等に市長の御理解を得ながら、人と物、それをバックとしたお金っていったものをできる範囲でつぎ込んでいきたい。ただ、そのときにですね、子どもたちにやっぱり、英語が使えることになると楽しいよ、世界が広がるよっていうことを示さなきゃ、遊びっていうか、おっしゃいましたけど、そういう楽しさみたいなものを理解させるためには、幼稚園とか小学校の低学年でALTと遊んで、なんか英語が通じたのって楽しかったよねっていう、こう、刷り込みみたいなことが、あの、やっぱりアンケートをとっても、子どもたちはみんな、英語しゃべれたらいいねって思っているんですね、本当に。その動機付けをもうちょっと強くすることで、今やろうとしている英語教育の実を取りたいなというふうには思っています。市民に関して言うと、いろいろあると思いますけども、やはりワールドカップっていうのは、みなさんに英語が使える機会のあれとして最大限、袋井市としては活かしていけたらいいんじゃないかなと思っています。

#### ●市長

僕は、学校教育の方は、カリキュラムで決まってくるんだったら、これはやっぱりお金が、ネイティブスピーカーに近い人をたくさん集めて、相当手厚くしていくことによって、いつからスタートにせよ何にせよ、あるいは場合によってはDVDがあればそれを使ったりする、そうとう工夫をしたスケジュールが、スキームができればいい。市民の方っていうのは、ある種何とつかねえ、インセンティブなかなか働かせにくいんだけど、市民の方はこれは、この指とまれ方式しかないかなって感じがします。市民のみんなに、3年間のうちに、ワールドカップなんで英語ができるように、そんなこと無理な話じゃないですか。だからむしろ、そういうふうなあれではなくて、市民の中はやっぱり、この指とまれの的に英語に興味のあるファミリーとか、あるいはそういう人に、適切な習う機会を提供しますよということやっていく方法かなと、基本的にそう思います。だから、学校教育は、私よく分かんないんだけど、どうやって、どうやって、どうやっていきますかというのを、是非、作戦を立てていただきたいと思うし、それは、今の教育委員会の中で作戦を立てるのか、あるいは、よく分かんないな、仮に英語のプロを入れるって、入れたってどういうこともないよ、意外に。と思いますけどね。っていうのは、先生の、いわゆる能力、その力も必要になってきますから。市民の方は、私はね、どこかきつと実践例がね、探せばね、いろんな全国の自治体これだけあるんだからね、相当あるような感じがします。例えば、うちのほうだってもちろん、ネイティブのスピーカーを今、CIRの人たちが来ている、それから、帰国子女とか、そういう帰国子女の家庭もどんどん増えていますよね。増えている人たちをもっと、どこで探せばいいのかなあ、探して、そしてそれも、さっき言ったパーフェクトな英語でなくてもいいから、帰国子女の奥さんも全部家でしゃべれる、しゃべれなくても、一回集まってごらんさといってやればね、そうすれば、それだけだって。それからもう1つは、男の人があれだとすると主に女性の人で、大学でそれなりの英語の課程を学んだ人



の中で、しゃべることに興味を持っている人っていうのを、少し、これはどこの課がやればいいんだろうな、想定をした方がいいんじゃないですか。それを、やる必要がない、全てネイティブのスピーカーに来てもらって、それでないとハナからできませんよじゃなくて、何だっけほら、東小学校で、刮目舎で教えている。

●前嶋委員長

アンジェラ。

●市長

彼女だって、いいあれじゃないですか。だからいっぱい、僕はね、いるような感じがしますんで、さっきの話で、発音がどうこうっていうのは、むしろ私は、学校の子もたちはできればネイティブスピーカーで習った方がいいような感じがするけれども、大人の方は、発音、関係ないってば。今更良くなんないよ。というくらいのね、大胆に割り切ってこの話をやってって、そのうちに、学校できちんとした発音を習った子が、だめな大人を駆逐しちゃうよ。「いいから、私が教える」、ね？ そうなるって。3年経ち、5年経っていくうちに。だから、そういうふうにやっていけばいいと思います。そういう意味じゃ、私は、可能な限り、大人でも「この指とまれ方式」、それを、1回この指とまれで集まらないからダメよでなくて、何回も何回もやる方法を生み出してくれませんか。それから、いろんな機関に協力をして、リストアップして、個別にあたってって見たら、結構、じゃあヤマ発におりましたとか、あるいはハマホトに関係者がおりましたとか、たくさんでてくると思います。昔と違って今は結構いるような感じがしますね。だから、そういう人を集めて、そこからスタートしたっていいと思うしね。

●前嶋委員長

ちょっとよろしいですか。9頁の各学校の概況っていうのがありますね。

●市長

資料3？

●前嶋委員長

資料4の9頁。これを見ると、中3の全国、袋井市内中学校、袋井南中で、A、B、Cってあるんですけども、中学3年の全国平均よりもトータルでは1ポイントくらい上。

●市長

南中ね。

●前嶋委員長

南中が、なっているわけですね。それで、その研究指定で早くからやっていたので、力がついたらということなんですけれども、じゃあ、なんで、早くやっていたらこれだけ力がついてきたかっていうのを、原因がしっかりと出ているかどうか分からないんですけども、その中に、ぱっと見て、過去の様子を見ていて思い出したのは、外国人に対する、人に対する垣根がないっていうことと、言葉に対する垣根がないっていうので、1年生の時から、そういうので子どもたちが、外国人、外国の言葉っていうものに対する違和感がないっていうものが、自然にこう、言葉がはいっているんじゃないかなっていうことを、私自身がそう感じるわけなんですけれども、それでなければ、これだけの20ポイントもね、上をいく理由はないだろうと。

●市長

だけど、前嶋先生。そうかもしれないけど、これ高いのはライティングだよ。この内訳を見ると。他はね・・・トータルは高いけど。僕ね、リスニングが高いのかな、ライティングが高いのかな、ねえ。いや、でも、小さい頃から書くのも違うかも知れないよ、そりゃあ。

●前嶋委員長

確かに、ライティングはすごいですね。

●市長

ライティングの中に読む力も入るのかな。読み取る力。あ、リーディングっていうのがある。

●前嶋委員長

垣根がないってことは確かですね。

●市長

そりゃそうだよ、英語に対する垣根。これ、南中の子どもたちは、いつからスタートしたの？ 小学校？

●前嶋委員長

それは、次の頁にあります。5頁です。平成19年。

●市長

それって、小学校1年から？

●前嶋委員長

中3ですね。この辺の原因を、加藤先生、追求していくっていうのはないんですか。

●学校教育課長

自分たちの話し合いや、いろんな確認作業の中でいけば、さっき言ったように、この小学校低学年からの活動を充実させていったことと、あともう1つ、中学校での英語の教員が、たまたまですけども、産育休や欠員講師等の講師対応が他の学校に少し多いっていうのが、袋井中学、浅羽中学校等は確かにあったかなと思っていますが、まず1つ、やっぱり小学校からの積み上げが一番大きいと考えています。

●市長

小学校の頃、この人たちは何をしているんですか？

●学校教育課長

ちょうど、あの、校長先生いらっしゃるので。

●前嶋委員長

そのときには、これで力がつくかというふうに、楽しくやりました。

●市長

楽しく、何をしてたんですか？

●前嶋委員長

楽しく歌を歌う。英語の歌を歌います。それから、スキット。何かの場面を設定して、英語劇みたいなことをやっていました。ですので、英語劇の時には、担任と、それから2、3人の人たちが一緒にいて、その英語劇に、ネイティブがやってくれたことを、私たちが相手にしてやったわけなんです。

●市長

ネイティブは、いつもいるんですか？

●前嶋委員長

いえ、毎週1回は。

●市長

1日？

●前嶋委員長

1日じゃない、1時間ね。

●市長

毎週1回、1時間？

●前嶋委員長

1時間。だから、1日のうちに、1年生から6年生までを上手に、こうやって2日くらいみえてくださって。

●市長

なるほどね、そうすると週で接する時間としては割と短いんですか。

●前嶋委員長

1時間。

●市長

でも、こうして効果が上がるんだから、小さな頃からやることは。そりゃそうだよね。学問じゃないもんね。道具だもんね。そりゃあ、全くそうですよ。

●前嶋委員長

だから、1年生からやっても意味がないっていうことはないということが、改めて感じます。

●上原委員

英語検定3級程度というのは、どの程度のことなんでしょうかね。

●鈴木教育長

どの程度とおっしゃると？

●上原委員

例えば、スピーキングだったらね、あいさつと、もうちょっと。

●鈴木教育長

もうちょっとできますね、はい。

●上原委員

レポートできるよ。書く方も、難しくない文章だったら、短い文だったら書けるよということですね。

●鈴木教育長

はい。今、国が目標とした率は6割ですけれども、現実的には日本全体は、3割くらいしか中学生で卒業時点でとれていません。ですから、上位3割くらいは、子どもたち、英語だけに関して言うと、まあこの3割っていうのは、実際に英検3級受かっている子と、文科省に報告するときに、その程度の力があるだろうという子も報告してるもんですから、単純に合格、だから3級合格程度のレベルが全国的にも3割ちょっとしかない。ですから、そういう点では割と3級ってのは、中学卒業時点で3級っていうのは、そこそこ。

●上原委員

僕が思うにはね、早くからはじめて、そういった英語の発音とか、外国語しゃべっている外国人の人に対する違和感を減らすっていうのが一番いいんだと思うんですけども、社会人にしても、小さい小学生の子どもたちにしても、ALTと一緒に勉強するときにしても、なんかしゃべりたくてムズムズしちゃうなー、みたいな気持ちにしてあげられるのが一番いいんだと思うんですね。実際の場面として、袋井から愛野まで電車に乗った時に、3年後にね、ワールドカップの時に、外国人も一緒に、横に座っていかどうか言われてきた時に、なんか、ふっと、次の駅でいいのかとか言われた時に、大丈夫だよと言えるくらいの会話ができたら僕はいいなというふうに思っています。気持ち的に、難しいことをたくさん覚えるのかっていうよりも、そんな、その一言二言がしゃべれるっていうことが、国際的であるっていう意識に変換できるような勉強ができたらいいなと思います。それは、真面目に勉強しようが、遊びで勉強しようが、どちらでもいいとは思いますが、あの、いわゆる、「グローバル」っていう言い方はやめたらいいかと、これからはね、違うだろうって。市民が、8万人、みんなグローバルになるわけがないね。それで言うんだったら、グローカルって言った方がまだしも。

#### ●伊藤委員

鳥飼さんなんか言ってますよね、小学校からやる必要はないって、断言しています。だから、さっき言いましたけどね、英語は英語で別にいいですよ、やった人は当然やる、やればいいんだけど、さっきの定義としてね、袋井市のグローバル人材っていうかね、英語がしゃべれるだけじゃなくてね、日本語だって。日本語を使って世界の人をもてなせる、これが袋井のグローバル人材。

#### ●市長

ちょっと違うと思ってる、僕は。そりゃあ、伊藤さんね、どうしてかって言うとね、やっぱりね、意志がね、意志が自分の、いわゆる、僕の家に来て「はい、寝る？寝るは2階」って、2階に僕が連れてって、ここであんた寝ればって、それはOKだよ。「お風呂はそこだよ」ってやれば、これもOKですよ。けどもね、それだとせいぜい一晩ですな。二晩目になるとまいつちゃう、もう、お風呂もあれも知ってるんだから。やっぱりね、その次に必要になってくるのは、今度は、あなたのファミリー、あるいは場合によっては、あなたの国はどこでね。ある程度、伊藤さんね、言葉のコミュニケーションがとれないといけないんで、私はね、そういう準備は、全部の家庭ではないですよ、いわゆるホームステイをやろうと心がける家庭に、僕は、それはやってもらいたいと思う。

#### ●伊藤委員

いや、僕はね、大阪のおばちゃんなんか一番いいイメージでいるんですよ。相手が来る、日本語だって向こうも使いたいと思っている人はいるかも知れない。僕らもフランスへ行きゃあフランス語少しは使ってみようように。だからね、そりゃあ、英語をやるのが一番、全然いいですよ。それだけじゃなくて、本当のグローバルっていうのは、外国人が来てね、別に英語をしゃべれなくても、日本語である程度応対できる、そういう人材が、本当の意味の僕はグローバル人材だと思う。

#### ●市長

ただ、学校で、いよいよこれで始まるじゃないですか。そりゃあ、文科省は文科省なりに考えて、これからやりましょうっていう中で、何だっけ、活動があって、その次に

プログラム、ここにある程度お金がかかりますよ。じゃあ、お金をかければ後は。お金をかける、教育予算をかける、いわゆる人件費を。そのあとね、受け取った学校の先生のほうを頼みますよ。先生のほうがお手あげで、そんなのやったら私ら困っちゃうなどではなくて、やっぱり教員の方は教員の方で。それは、なんて言ったらいいのかな、指導要領がそうなっていて、まして、うちは、ワールドカップのあれをやりましょうよっていうときに、やっぱり僕は、学校の、じゃあ市がそれだけのものを用意したときに、学校の先生があっぷあっぷだからノーサンキューなんていうんじゃないで、OK、そこまでやるんだったら、学校のわれわれもそれでいきましょう、っていうくらいの迫力は欲しいねって感じはするね、少なくとも。

#### ●鈴木教育長

ALTを増やしていただくっていうこともあれなんですけど、小学校の場合に、基本的に先生方は全て英語を教えなきゃならない。先生方にとって、たぶん今一番、もしかしたら、ありがたいのは、英語の研修の機会を与えて。

#### ●市長

だけどねそりゃあ、研修の機会って言うけれども、それは、研修の機会を静岡県教育委員会でも何でもやってくれればいい。袋井市でそれをやらなかったら私はやだよ、っていうのではなくて、小学校の先生だって教育課程をとって、大学で英語を勉強しているでしょう？ みんな。私だってそうじゃないですか。その人たちが教えている程度の英語で結構だつてば。これは大目な意見ですよ。さっき僕の言った、発音も関係ないよと。単純なことをね。「This is a pen」は必要ないんだけど、見ればペンだから分かります。僕はね、小学校の先生や中学の先生が、私は英語専門じゃないから教えることができないっていうね、それを払底しちゃってね、小学校の子どもの3年4年に英語の文法の部分を何も関係なくって、ただ、DVDの操作ができるとか、それを自分があらかじめ聞いておいて、ちょっとここで言ってるの、先生、あれどういう意味？って言ったら、これはこういう意味だよって話せばいいんだから。そういう意味では、僕はそれはむしろね、学校って、大学の教員の試験をとっている人は、それくらいのことは当たり前だと思うんだけどな。

#### ●鈴木教育長

これからの、新しい教員養成課程の中に、当然そういう、英語に関して会話的なものが入ってくるのですが、今、私が申し上げたかったのは、学校に対する英語教育の支援って、ALTつけるっていうのもあるし、この資料の中でちょっと見ていただきたいのはですね、ええと、どこだったけ？各市の取り組みを入れてくれたのは。

#### ●教育企画課

資料4の裏です。2頁目の真ん中のあたり。

#### ●鈴木教育長

資料4の2頁目です。資料4の2頁目に、参考として、英語教育他市事例っていうのがあって、実は最近ちょっと流行になるのは、オンラインでフィリピンとか、割と人件費安いところでオンラインでインターネットで英会話、個人レッスンが受けれるっていう。これを実は、子どもたち全員に、オンラインで直接ネイティブスピーカーと話しをさせるっていうことを始めているところがある。ですから、私がちょっと先生方の研修っていう話をしたのは、また研修会やって集まってとかではなくて、例えば、職員室に

1台オンラインでつながるものがあるって、空き時間にそこで先生方が、ネイティブと、10分から15分なりとも毎日少しずつ会話できるとかっていうふうなことも含めての研修って話です。

●市長

ただね、いや私は、それも必要かも知れない。それができないというのが困るんで、実は。だってね、学校の先生でね、あれあるじゃないですか、スピードラーニング。あれだってね、やりましたか？先生。僕はあれ買ってやったんだけど。できる。いやいや、あれだってね、私はね、教師の方にそういうスタンスを要求したいって言うの。だから、発音も関係ない、文法も関係ない、本当になんて言っていいか、小学校の3年から4年の子が学ぶ英語だから、たかだか知れてるよ。だって、事務職の中にだって、何も法学部出身じゃなくって、とんでもない学部を、文学部出身の子がちゃんと法律を基に仕事してますからね。我々よ、市の職員。試験もとおってくるじゃないですか。だったら、学校の先生が英語の専攻じゃないって、大学の4年間通ってるんだからってわるいけど、教員の採用試験とおっている人が何でできないんですかと。本当にね、不思議だよ。ね？ 私ね、ちょっとそれはね、じゃあこういう方法でひとついきましょうという方法があれば、その方法に市も応じていきたい。っていうのは、せっかくこういう機会があったときに、私はやっぱり、袋井の子どもたちの英語力の向上に力を注ぎたいし、市民の向上にも注ぎたい。そのためには、少なくとも教育関係でお金が当然必要になってくる。時間は率直に言って私が満たすことはできないから、時間と方向は、学校の先生をその方向で満たしてよと。ただ、お金がこれだけかかりますっていえば、それを計算して、じゃあこれくらいの金額でいきましょうや1年目、2年目はこうしましょうっていうことは、工夫できると思いますので、是非、それは僕がお願いしたいと思うな。本当に。それがうちの教育の特色になると思うの。だから、何も、全国学力試験？ いってば、そんなのどうでも。それよりも英語の力だったらうちは負けない。いやいや、極端なことを言って。それくらいね、何か、せっかくだったら特色を持っていただけないかなって言うのが。

●鈴木教育長

あの、今、どうでもいいとおっしゃっていただいたんですが、実は平成30年には英語の全国模試がはじまります。ですから、中3は、今、小学校6年と中3、中3は数学と国語だけですが、平成30年にはそれに英語が入りますので、ちょっと全国平均が出ます。あの、市長がどうでもいいとおっしゃったので。それが、その「話す」が入ってくる。「話す」が入った全国統一模試です。どうやってやるのか。

●市長

どうやって話す。ねえ。「聞き」は分かるんだけど、「話す」はどうやってやる。

●鈴木教育長

コンピュータテストで、これから。それか、さっき言ったようにオンラインで、そこの前にいって、試験官はいなくて、そこでやるようなテストを考えている。

●市長

そりゃあ、できるかも知れない。

●鈴木教育長

英検の3級以上はそうやって。これは、面接があるもんですから、実際の人間と面接

やって英検3級の方はですが、それをまあ、オンラインでパソコン使ってやるような方向でないと、とてもやれない。ただまあ、今のところまだ具体的には出ていません。でも、今回の、その平成30年に行われるのは、そう聞いています。「話す」が入ってきます。

●市長

あの、だんだん時間が押してきたんですけども、少し英語の方は、私は自説を言わせていただいて恐縮だったんですけども、じゃあ、この次が10月・・・あ、他に意見どうですか？ いい？ 10月の26日に、この総合教育会議、じゃあ今度の総合教育会議、この次の10月のときは、来年度の予算に関係してきますよ。だからね、そういう意味で、私はこのICTは、是非、教育委員会で進める方法案を、今あるものを基に、こうやって進めていきますっていう、来年の予算に向けて、その方法案を作っちゃってください。別に、金額で、積算して予算要求じゃなくてもいいんで、骨子を作って。それを基にみんなでちょっと議論をしてみましようよ。浅羽南小でね、うまくいったんだったら、それをこういうふうに進めましようやっていうのを。電子黒板はできちゃう話だもんね。それから、英語力のほうについても、こういう方法、こういう方法、こういう方法でいくっていうことで、具体的な、ある種方法論を、提示していただだけませんか。この結果、この分析は分かりましたんで。それもまた、ここで話をして、実行すべきは実行すべきでやっていったらどうかなという感じがしますけれどもね。あの、なんかいい案で、学校はこうやっていく、市民はこうやっていくっていう方法がでてくれば、それをやるように予算に結びつけていきます。学校の先生が、英語がしゃべれる、しゃべれない、ちょっと言い過ぎましたかな。やっぱりほら、先生って、そりゃあ、今日いる教育委員会の人はみんなそうだけれども、完全主義者過ぎるよ。もっと、いいかげん主義者で十分。いいかげん主義者で学校の教育ができるって。いやいや、僕はそう思うよ、本当に。だから、上原さんと私を見てご覧なさい。いいかげんな人はだいたい、いいかげん。

●伊藤委員

一番いいかげん。いいかげんだけど、「いい加減」。

●市長

そういうことだよ。

●上原委員

あの、僕なんか、さっき言いましたよね。学校の英語の先生の発音が信用できなくなったのは、1989年なんですけども。アメリカのホテルで、日本に葉書を出そうと思って、切手売ってる場所で、切手1枚25セントか35セント、1枚いくらですかって聞いたらね、25セントって聞こえたの。だけど、25セント出しても切手をくれないわけ。そしたら、何回も何回も聞いたら、そうじゃなくて35セントだって。その黒人のおばちゃんはね、ちゃんと35って言ったって言うの。日本の先生に教えてもらったときの25に聞こえるわけ。こりゃあ、日本の先生はだめだなって。そのほかに、英語の発音を覚えたのは歌です。英語の歌で、例えば、伊藤さんの得意なビートルズとかね、カーペンターズの歌とかね、わりあいきれいな英語で歌詞ができていて発音も分かりやすい。ああ、こういうふうな発音するんだなあっていうのが、よく分かりました。学校で習った発音は、ほとんど役に立たなかった。

●市長

僕は、豊田さんの言った、いわゆる単語を並べると、その能力で相当。だから、単語

を知らなくちゃだめなんですよね。だからそれは、知らなけりゃ別のいろんな言い方をすればいいけども、それはなかなかえらい時間がかかる話なんで、やっぱり僕は、ある程度の言葉は知っていて、若干の慣用句さえ知っていれば、たいがいでできると。学校の先生、それはできるはずだよ、私よりもっと、と思っているの。

●前嶋委員長

じゃ、カルタみたいに覚えればいいってことですよ。

●市長

そうそうそう、どんどんどんね。僕、できると思うんで、むしろそれでいいんじゃないかなあって気がするんだけどな。だって、全学校で始めるよね。3年4年で始めるよ、小学校で。小学校って、担任はあるけども、得意がないんでしょう？

●前嶋委員長

教科担任ね。

●市長

中学と違うもんね。みんな、中学の先生になりたくなっちゃうかな。小学校の先生になるの、みんなヤダって。

●前嶋委員長

かも知れませんね。

●市長

ある？ 可能性、ある？

●前嶋委員長

全部やらなくちゃいけないですものね、小学校はね。全部の教科と、ICTまでやらなくちゃいけない。

●市長

ああ、そうなってくると大変。

●豊田委員

この、タブレットで英語教育。

●市長

できるんじゃないの。

●豊田委員

ですよ。できますよね。イヤホンでもやりながら、しゃべれば、答えてくれる。

●前嶋委員長

子どもがね、何か、外国人が声をかけてくれたときに、逃げちゃう。そういうのを無くしたいですね。

●市長

たぶん、逃げなくなるんじゃない？ ALTとか、そういう人が多くなってくると。

●前嶋委員長

そうですね。おもてなしじゃないので。

●市長

そりゃあそうだよ。

●伊藤委員

英語ができなくても、避けちゃいかんわけ。それが、グローバル。物怖じしちゃう、



いかん。

●教育部長

どうも、長時間にわたりまして、ありがとうございました。今、市長からも話がありましたが、次回は10月の26日ということで、午前10時からこの場所で開催する予定であります。

●市長

こういうことをやっていくにはどうしたらいいかっていう具体的な施策で、金額まで必要ありませんから、やってください。それを基に、たたいて、あとは。あれ、予算っていつ頃までに要求するんですか？

●教育部長

ええと、10月の・・・

●市長

その頃はもう終わっちゃってる？

●教育部長

いえ、まだ。11月の上旬くらいです。第1週くらいが、いつも例年ですと、入力の手締め切りになります。

●市長

じゃ、間に合う。はい。

●教育部長

はい。それでは、本日はどうもありがとうございました。